

新型「コロナ」で思うこと

3月末のある新聞の社説に、米国の投資家バフェット氏が

「潮が引くと、誰が海水パンツを履いていなかったかが初めて分かる。」

として、平穏な時には見えにくかったことが、非常時や危機の時に初めて露呈すると述べています。世界は新型コロナウイルス感染症の蔓延という、とんでもない引き潮に苛（さいな）まれていきます。日本政府はユーロ危機以降、超緊縮財政を余儀なくされる中で、医療費も削減してきました。考え抜いて「無駄」を削ってきたつもりが、急激な衝撃を吸収する「ゆとり」を削ってしまったとの見解でした。

地震、台風、猛暑などの自然災害の当事者を被災者と言います。マスコミは、新型コロナウイルスによって世界中が被災者となったと言っています。

当町はこの一年間で、筆岩の林野火災、台風19号災害、新型コロナウイルスと大きく三回の被災を経験しています。その都度、「ゆとり」と「国県レベルの広域連携」の大切さを思い知らされました。

これらの災害では、様々な支援が国や県からある一方で、町単独の支出も大きくなっています。しかしながら町村合併以後（前佐々木定男町長時代）に、非常時の緊急支出を想定した基金（貯金）を積み立ててきました。新型コロナウイルスが中期化する場合であっても、ある程度は耐えうる財政力が当町にはあります。

世界の産業構造は、ウイルスでとてつもなく大きく変化しています。町内のあらゆる産業が打撃を受け、先が

見えない不安は生半可なものではありません。経営の見直しや変容脱皮を迫られる経営者も少なくないと考えています。今後は「分散」がキーワードになると言われています。生産拠点分散、顧客分散、オフィス分散、安全保障のための農林の充実・拡大とありますが、先ずはウイルス禍の中で生き抜くための支援に努めてまいります。

「オール佐久穂」のため、町民の皆様をお願いします。歴史上、戦争や災害、今回のような新たな感染症が現れると、人は大きな不安と恐怖にかられます。その感情は本来身を守るために必要と言われています。ところが集団心理になると違ってきます。情報に翻弄され過度に他人を攻撃してしまうようです。

80歳代の町民から聞いたお話です。「太平洋戦争末期、佐久穂町には多くの子ども達が学童疎開に来ていた。その頃小学生だった自分達は、その子たちに酷い言葉を浴びせながら、石を投げた。毎日、毎日……。終戦から十数年後、悪いことをしたと心から思った。後悔から空襲を避け、食糧難に苦しみ、親と離れて逃げてきた人達なのに。大人の言葉を信じてしまった。」

人はそれと気付かず偏見や差別をしてしまいます。された人の心は容易には戻りません。学童疎開もコロナも同じだと思います。報道される差別的行為は、遠い場所の出来事とは限りません。「温かい佐久穂」であることをお願いします。

人権への配慮を第一に考え、冷静な行動をお願いします。

（令和2年5月6日筆）

町長コラム オール佐久穂のまちづくり

